

Archive I

【講演録】

創業社長 高橋吉助の講演より抜粋 (昭和58年1月23日 於 花巻鉄工会)



(前略)

私のおじいさんは大沢で生まれております。12、3歳のころだと思いますが、大工になろうと思って大工奉公をしたわけですが、その先は鬼柳だったそうです。まず花巻からそこへ行く、それは相当有力な偉い師匠さんだったろうと思います。

(中略)

合計13年いたそうです。一生懸命やったに違いないのですが、これであればどこへいっても引けを取らない、大丈夫だからまずやってみると返されてきた。その時30歳位だと推定しますが、(中略)花巻のどこかで独立して仕事を始めた。かなり急速に認められ数年の後、はっきりわかりませんが花巻のお城、御用大工の棟梁に選ばれたそうです。腕が良かったと思うし、前に居た人が年取って死んだとか何かがあって推薦されたようではありますが、私の親父から聞いたのは年俸、その当時武士と同じように100人扶持を貰ったそうです。100人扶持を全部自分で使うわけではありません。大工さんたちはもちろん、左官さんとか、石屋さん、屋根屋さん、そういったものに関連のある職人を100人くらいいつでも声を掛けたらすぐに集まる体制を作っておかなければならない責任がある。だから仕事をさせなくてもある程度の手当てをくれて、お城のご用のあるときはすぐ来てください、何を取りおいても行きます、という状態にして自分はやっと食べられるだけを頂戴し、出来るだけみんなでやらなければお城のご用は務まらないわけだから、そういう体制を整えていたそうであります。明治5年の

廃藩までその状態で務めていました。

明治5年には皆さんご存知のように花巻は南部藩の出先、当然盛岡の南部藩も朝敵になったために役にも付かないでお城は解体させられ、現在もありませんが、花巻でもそれと同じになって、建物を解体して、解体した木材を町の人たちに柱一本いくら、として払い下げをしたそうです。お城に使うような立派なものではなかったそうです。建物は全部で、小屋とか倉庫、武器、弾薬の倉庫とかいろいろあって14棟あったそうです。本丸ともいべきものは2階作りで頑丈な小屋、といったような造りであったようです。

(中略)

そして明治5年に私の父親常吉が生まれたわけがあります。(中略)私の兄貴は皆さんもいづらかご存知かと思いますが、幸助(こうすけ)といいまして、その次は直助(なおすけ)、その次は良助(りょうすけ)、4番目の吉助(きちすけ)、その次は女、6番目で五男の泰助(たいすけ)が生まれております。この子供を育てるのに一介の職人ではだめだという親父の考えで、何か副業ということを考えて花巻の石神に自分の手で出来る、その当時動力といえば水車でしたから水車小屋を作って副収入を図ったわけです。私が学校を卒業したのは大正7年ですが、私が1年生の時に向う(石神)へ移りました。その時はまだ電気は無かったのですが、まもなく大正5年に電気が出来まして、動力は電気になって、水車じゃなくても米もつけるし製材もできる。その当時の精米機は杵ですが、丸鋸を引っかけて製材を行う、たいした評判で最も新しいやり方でした。

(中略)

私の母親は台におりました。おじいさんの弟子で

佐々木新蔵というものが居て、その人の3番目の長女を（父の常吉は）嫁にもらいました。弟子の娘を自分の次男にもらった。その佐々木新蔵という人は、人柄も良く非常に腕の良い人で明治14年に明治天皇が東北巡行の際の行在所を建てました。（中略）総檜でとても吟味した建物だったそうですが、大きさは証拠がなくてわかっておりません。それが明治22年の火災で焼けてしまいました。それはたいした吟味したものだっただけです。

（中略）

ところが新蔵の長男の政吉は、安野の橋を請負い、すっかり損してしまいました。その時は30才前後だったと思われませんが、その当時花巻で県工事が出来る人はそれしかいなかったのです。（中略）どうして損したかといいますと、その当時向うから来た官選知事でお上から指名されて来る南の九州あたりから来た人で岩手県知事になって来て、その子分と一緒に来て、その人が請負をしてその下請けをしたというわけです。

（中略）

かなり資力がなければできなかったわけです。新蔵という人はいくらか産があってやりくりが利く、信用もあったものですから、材木などは後回しでもいい、私の母親の兄貴、新蔵の長男政吉が請負したのです。すっかり出来て検査も合格、検査を合格すればお金が下がるわけですが、直接受け取るわけにはいけません。検査合格して直ちにその人は盛岡の旅館に時々来て泊まって、出来たころはもちろん来ていたのですが、出来ていたために金を全部下げて、そのまま九州へ行ってしまったというのです。

（中略）

金をひとつも貰わないで親父の信用とか、まとめたのに一銭ももらえないでしまった。それでも親父は仕

方がないと全部資産を売り払って、地元の人たちに迷惑をかけてはいけないというので屋敷だけ残してきれいに支払ってくれたそうです。そういうのが長男だったわけです。

その弟で、喜三郎は風流人、骨董屋で陶器や掛け軸を商いする人であったそうです。

喜三郎というのは私のおじさんになりますが、やぶやの初代佐々木圭三の父親であります。

（中略）

機械大工といったような私の親父が、主にももちろん大工でしたから木造が中心でありましたけれども、これからの機械は木ではだめだ、鉄でなければ機械にならないというので鉄を勉強した方がいいと言われていたので、私の兄貴、弟、協議いたしまして、早速旋盤1台買いました。6尺旋盤でしたが、中古品でさえも花巻にはどこにもありませんでした。もちろん新品ですが180円でした。

（中略）

昭和13年に父親が死んだというので直ちに帰って来ました。（中略）

葬式を済ませてまた3人でやりましょうと昭和15年に有限会社花巻鉄工所を作りました。今の建築の工場の所に経済連がありましてその隅に昭和15年に200坪の土地を買い、鋳物工場、機械工場全部を兼ねた120坪の建物を建てそこで始めました。

（中略）

現在の場所3,000坪を借りたいがとても借りられるものではないと言われていましたが、前からお世話になっている相庄さんの旦那さんに頼みました。旦那さんとは昨年2月に亡くなった人のお父さんです。（中略）旦那さんと一緒に地主の宮善さん、梅とうさん、高橋豆腐屋さん、阿部さん、小原元二さん、その他いろいろありますが1日で全部借りました。若い者が

工場を建てるそうだがお宅の土地をお借りしたい、こいつは高常の息子だとの口添えがあり1日で全部借りることが出来ました。工場の配置は私为中心になって作り、昭和18年に1年で14棟作りました。

(中略)

18年に工場を建てましたが、その当時戦争がだんだん激しくなって食料も兵器と同じくらい大事だと国の政策で秋田県、岩手県と農機具を確保する工場を持たなければならないという法令ができ、県では岩手県農業会に言いつけてうちの工場を買いたい、買うけれども運営は任せる、仕事は減らさないように絶対やる、資金も必要であれば出す、農業会で工場を持たなければならない、借りたのではだめだ、という話がありまして、売ることにしました。無料で使えるし、国策なので、国のために働かなければならない時代でした。

(中略)

作ったものは足踏み脱穀機、馬耕、馬で引く^{すき}鋤、これもずいぶん作りました。その当時県内配給でしたから、大型トラック2台あって資材の配給、製品の搬出等をやりました。

(中略)

その間、釜石製鉄所や日立製作所の協力工場になりました。釜石製鉄所からは艦砲射撃されることを予想していろいろな部品を頼まれる、空貨車のある時は製鉄所で作った平鉄、丸鉄、コークス、石炭をどんどん送って来て山盛りしておりました。終戦と同時に全部もらうことになり、釜石より作っているのは平鉄と丸鉄だけで鉄板類は作っていませんでしたので、たいした恩恵はなかったけれども、物と交換して利用することができました。そうして終戦となって徴用で向うへ行って来た人たちが帰って来て、腕ができていない人たちでも、人が欲しかったためにどんどん入れて、

180人ばかりになりました。

終戦後に労働争議ができ、とても今のようではなく、悪質な労働組合で、その人たちのスローガンは工場を潰すのが目的で、何でもかんでもよこせ、よこせ、作ったものはろくなものではないから金も入らない、働かなくても賃金は優先である。月末になればもちろん払うのですが、釜石からよこされた資材が山のようにあってほしい2,000トンありました。それを売って賃金を払うということを繰り返していたのですが、ただ居れば山をも食いつぶす、というようにたちまちに無くなって、工場を抵当に入れ、機械を抵当に入れて、金を借りて払う。実に経営者としては全くで、その人たちに対応するだけで、どうしてこうしようかという頭も廻らず、仕事もしなければならない、押され通してたちまち破産ということになりました。それが昭和24年になります。

破産と同時に兄貴もこういうことは駄目だ、弟も銀行に借金が残っていかれなくなりましたが、私はやってやると思いました。なぜかという、そうでなければ食べていかれない、ということは弁当持って手間を取ることが、私にはできなかったからです。

(後略)

—以上—